

日蓮大聖人御書全集

そやにゆうどうどのごへんじ

曾谷入道殿御返事

によぜがもん こと

（如是我聞の事）

そやにゆうどうどのこへんじ　によぜがもん　こと

曾谷入道殿御返事（如是我聞の事）

けんじ　ねん　がつ　にち　さい　そやきようしん

建治 3 年 (77) 11 月 28 日　56 歳　曾谷教信

みようほうれんげきよういちぶいつかん　しょうじきよう　ごくよう　ごふせ

妙法蓮華經一部一卷へ小字經御供養のために、御布施

こそでふたかさ　がもくじつかん　おうぎひやつぽん

に小袖二重ね・鵝目十貫、ならびに扇百本。

もんぐ　いち　い　によぜ　しよもん　ほったい　あ　き

文句の一に云わく『如是』とは、所聞の法体を挙ぐ。記

いち　い　ちようはち　によぜ

の一に云わく「もし超八の如是にあらずんば、いずくんぞ

きよう　しよもん　うんぬん　けこんぎよう　だい　い

この經の所聞となさん」云々。華嚴經の題に云わく

だいほうこうぶつ　けこんぎよう　によぜがもん　うんぬん　まかはんにやはらみつきよう

「大方広仏華嚴經　如是我聞」云々。「摩訶般若波羅蜜經

によぜがもん　うんぬん　だいにちきよう　だい　い　だいびるしやなじんべん

如是我聞」云々。大日經の題に云わく「大毘盧遮那神變

かじきよう によぜがもん うんぬん

加持経 如是我聞」云々。

いっさいきよう によぜ によぜ

一切経の如是はいかなる如是ぞやと尋ぬれば、上の題目

さ によぜ もう ほとけ きよう

を指して如是とは申すなり。仏、いずれの経にても、とか

たま によぜ り 指 だいもく たま

せ給いしその所詮の理をさして題目とはせさせ給いしを、

あなん もんじゆ こんごうしゆとう めつご けつじゆう たま とき だいもく 打

阿難・文殊・金剛手等、滅後に結集し給いし時、題目をう

置 によぜがもん われき もう

ちおいて、「如是我聞（かくのごときを我聞きき）」と申せ

しなり。

いっさいきよう うち かんじん だいもく 納 れい てんじく もう

一経の内の肝心は題目におさまれり。例せば、天竺と申

くに くまんり しちじつかこく なか

す国あり。九万里・七十箇国なり。しかれども、その中の

にんちく そうもく さんが だいち みな がつし もう にじ うち 歴 々

人畜・草木・山河・大地、皆「月氏」と申す二字の内にれきれき

たと いちしてんげ うち ししゅう なか いっさい

たり。譬えば、一四天下の内に四洲あり、その中の一切の

ばんぶつ つき うつ 少 隠 きよう

万物は月に移りてすこしもかくるることなし。経もまたか

きよう なか ほうもん きよう だいもく なか

くのごとく、その経の中の法門はその経の題目の中にあ

り。

あごんきよう だいもく いつきよう しよせん むじよう り 納

阿含経の題目は、一経の所詮、無常の理をおさめたり。

げどう きよう だいもく 阿 漚 にじ 勝

外道の経の題目の「あう」の二字にすぐれたること

ひやくせんまんばい くじゅうごしゆ げどう あごんきよう だいもく き

百千万倍なり。九十五種の外道、阿含経の題目を聞いて、

じゃしゆう たお むじよう しやうろ 赴 はんにやきよう だいもく

みな邪執を倒し、無常の正路におもむきぬ。般若経の題目

を聞いては体空・但中・不但中の法門をさとり、華嚴經の

だいもく

き

ひと

たんちゅう

ふたんちゅう

ほうもん

覚

だいにちきよう

題目を聞く人は但中・不但中のさとりあり。大日經・

ほうどう

はんにやきよう

だいもく

き

ひと

しやつくう

方等・般若經の題目を聞く人は、あるいは析空、あるいは

たいくう

たんくう

ふたんくう

たんちゅう

は体空、あるいは但空、あるいは不但空、あるいは但中・

ふたんちゅう

り

覚

じつかいごく

ひやつかいせんによ

不但中の理をばさとれども、いまだ十界互具・百界千如・

さんぜんせけん

みようかく

くどく

聞

三千世間の妙覺の功徳をばきかず。

せん

と

ほけきよう

ほか

りそく

ぼんぷ

か

その詮を説かざれば、法華經より外は理即の凡夫なり。彼

きようぎよう

ぶつぼさつ

ほけきよう

みようじそく

およ

の経々の仏菩薩は、いまだ法華經の名字即到に及ばず。い

だいもく

とな

かんぎようそく

かにいわんや、題目をも唱えざれば、觀行即到にいたるべし

や。故に、妙樂大師、記して云わく「もし超八の如是にゆえ みようらくだいし しる い ちようはち によぜ

あらずんば、いずくんぞこの経の所聞となさん」云々。彼々きよう しょもん うんぬん かがれ

の諸経の題目は八教の内なり、網目のごとし。この経のしよきよう だいもく はつきよう うち もうもく

題目は、八教の網目に超えて大綱と申すものなり。だいもく はつきよう もうもく こ たいこう もう

今、妙法蓮華経と申す人々は、その心をしらざれども、いま みようほうれんげきよう もう ひとびと こころ 知

法華経の心をうるのみならず一代の大綱を覚り給えり。例ほけきよう こころ 得 いちだい たいこう さと たま れい

せば、一・二・三歳の太子、位につき給いぬれば、「国は我いち に さんさい たいし くらい 即 たま くに わ

が所領なり、摂政・関白已下は我が所従なり」とはしらしよりよう せつしよう かんぱくいげ わ しよじゅう 知

せ給わねども、なにもこの太子の物なり。譬えば、小児はたま 何 たいし もの たと しように

ふんべつ こころ

ひも ちち ぐち 飲

じねん

分別の心なけれども、悲母の乳を口にのみぬれば自然に

しようちよう

ちようこう

こころ 傲

しんか

たいし

生長するを、趙高がように心おごれる臣下ありて太子

侮

み

滅

しよきよう

しよしゆう

かくしやとう

ほけきよう

をあなずれば身をほろぼす。諸経・諸宗の学者等、法華経

だいもく

とな

たいし

ちようこう

の題目ばかりを唱うる太子をあなずりて、趙高がごとくし

むけんじごく

お

ほけきよう

ぎようじや

こころ

知

て無間地獄に墮つるなり。また法華経の行者の、心もしら

だいもく

とな

しよしゆう

ちしや

脅

たいしん

ず題目ばかりを唱うるが、諸宗の智者におどされて退心を

起

胡

亥

もう

たいし

ちようこう

殺

おこすは、こがいと申せし太子が趙高におどされ、ころさ

れしがごとし。

なんみようほうれんげきよう

もう

いちだい

かんじん

南無妙法蓮華経と申すは、一代の肝心たるのみならず、

ほけきよう　こころ

たい

しよせん

ほうもん

法華經の心なり、体なり、所詮なり。かかるいみじき法門

ほとけ

めつごにせんにひやくにじゅうよねん

あいだ　がっし

ふほうぞう

なれども、仏の滅後二千二百二十余年の間、月氏に付法蔵

にじゅうしにんぐつう

たま

かんど

てんだい

みようらく

るふ

たま

の二十四人弘通し給わず。漢土の天台・妙楽も流布し給わ

にほんこく

しょうとくたいし

でんぎようだいし

せんぜつ

たま

ず。日本国には聖徳太子・伝教大師も宣説し給わず。され

わほつし

もう

ひがごと

しよにんうたが

ば、「和法師が申すは僻事にてこそあるらめ」と諸人疑つ

しん

だいいち

どうり

たと

しようくん

て信ぜず。これまた第一の道理なり。譬えば、昭君なんど

怪

つわもの

犯

ひと

をあやしの兵なんどがおかしたてまつるを、みな人、「よ

おも

だいいん

くぎよう

も、さはあらじ」と思えり。「大臣・公卿なんどのようなる

てんだい

でんぎよう

ぐつう

ほけきよう

かんじん

なんみようほうれんげきよう

天台・伝教の弘通なからん法華經の肝心・南無妙法蓮華經

わほつしほど

とな

うんぬん

を、和法師程のものがいかで唱うべし」と云々。

なんだち

し

からす

もう

とり

むげ

下衆ちよう

汝等これを知るや。鳥と申す鳥は、無下のげす鳥なれ

わし

くまたか

し

ねんじゆう

きつきよう

し

へび

もう

ども、鷲・鵬の知らざる年中の吉凶を知れり。蛇と申す

むし

りゆう

ぞう

およ

しちにち

あいだ

こうずい

し

虫は、竜・象に及ばずとも、七日の間の洪水を知るぞか

りゆうじゆ

てんだい

し

たま

ほうもん

きようもん

し。たとい竜樹・天台の知り給わざる法門なりとも、経文

けんねん

うたが

たも

にちれん

卑

顕然ならば、なにをか疑わせ給うべき。日蓮をいやしみて

なんみようほうれんげきよう

とな

たま

しょうに

ちち

疑

南無妙法蓮華経と唱えさせ給わぬは、小児が乳をうたごう

嘗

びようにん

くすし

うたご

くすり

ふく

てなめず、病人が医師を疑うて薬を服せざるがごとし。

りゆうじゆ

てんじんとう

し

たま

とき

き

竜樹・天親等はこれを知り給えども、時なく機なければ

ぐつう

たま

よにん

知

せんでん

弘通し給わざるか。余人はまたしらずして宣伝せざるか。

ぶつぼう

とき

き

ひろ

い

仏法は時により機によりて弘まることなれば、云うにかい

にちれん

とき

そうろう

なき日蓮が、時にこそあたりて候らめ。

せん

みようほうれんげきよう

ごじ

とうじ

ひとびと

な

詮ずるところ、妙法蓮華經の五字をば、当時の人々は名

おも

そうら

たい

たい

こころ

とばかり思えり。さにては候わず、体なり。体とは心に

そうろう

しょうあんい

じょおう

きよう

げんい

の

て候。章安云わく「けだし、序王とは經の玄意を叙ぶ。

げんい

もん

こころ

の

うんぬん

しゃく

こころ

みようほうれんげきよう

玄意は文の心を述ぶ」云々。この釈の心は、妙法蓮華經

もう

もん

ぎ

いつきよう

こころ

しゃく

と申すは、文にあらず、義にあらず、一經の心なりと釈

そうろう

だいもく

離

ほけきよう

こころ

たず

せられて候。されば、題目をはなれて法華經の心を尋ぬ

もの さる きも 尋 果 無 かめ さんりん
る者は、猿をはなれて肝をたずねしはかなき亀なり。山林を
捨 このみ たいかい ほとり 求 えんこう
すてて菓を大海の辺にもとめし猿猴なり。はかなし、は
かなし。

けん じ さんねんひのとうししもつきにじゅうはちにち
建治三年丁丑霜月二十八日

にちれん かおう
日蓮 花押

そ や じろうにゆうどうどの
曾谷次郎入道殿